万紫に
値する！

喚く狂人

わめしば

18歳未満の閲覧を禁ず

目次

壁に尻あり　5

萃萃スー堕ララッタ　67

ゆからんの誉れ　167

壁に尻あり

天狗の新聞など、誰がまともに読むものか。およそまともなことなど書かれていないのだ。根も葉もない噂、下世話なゴシップ、嘘八百。真面目に取り合うものではない。

ここに、そんなものを読んでいる物好きがいた。八雲紫だ。とはいえ、彼女とて好き好んで手を出したわけではなかった。変な時間に目が覚め、そのまま寝付けなくなってしまったので、仕方なしに読み始めたというだけのことだった。

時間が時間であるため、部屋の中は暗い。闇の中で、その顔がシェードランプの橙色の光に照らされ、ぼんやりと浮かびあがっている。見る者を男女問わずどきりとさせるような美貌だ。切れ長の瞳は長い睫毛に象られており、すぅ、と通った鼻筋は、つんと最後には尖る。潤いをたたえた唇は紅などなくとも華やかで、今は一文字に結ばれていた。

紙面には、よくもまあこんなものを印刷できたものだと思うほど、下品な記事が並んでいる。どれもこれも知性がない中で、特にひどい見出しが目を引く――**怪奇！　下半身丸出し妖怪!?**

『――近頃、深夜の人里を、妖怪と思われる謎の存在が徘徊している。女の下半身だ。上半身はなく、衣服すら身につけていない。それは正体不明ではあるものの無害であり、何をされても抵抗しない。里の男の中でも特に女に飢えている連中は、夜な夜なそれを探しまわっている。丸出しの女性器を、指やら己のナニやらで弄るために――』

あとは、隅から隅まで下品な表現の羅列で埋め尽くされていた。言うまでもなく与太話だ。安い酒場の酔いどれでも、こんな馬鹿な話は信じないだろう。

「く、くふっ」

あまりにも阿呆らしく、笑いすらこみ上げてくる。けれども、一番笑えるのは、この記事の馬鹿馬鹿しさそのものではない。もちろんそれも面白かったが――なにより、こんな間抜けな記事が、この新聞において唯一真実を述べているということ。その皮肉を、彼女は笑っていた。

テーブルの上に三流紙を放り置いた。これ以上読んでも、もはや面白いものは見つかるまい。それなら、もっと別なことをしたほうが、いくらか有意義であるというものだ。

立ち上がった。寝間着を、おもむろに脱ぎ始める。服の上からでも分かるほど豊かで整った肉体が顕わになる。ヴィーナスやアフロディテの例を引かずとも、美を象徴する女神など枚挙に暇がない。だが、紫の身体は、間違いなくそのどれをも上回るものだった。細い首筋、優雅に伸びる肩と鎖骨の稜線。女であることと、その美しさを誇るかのような豊かな乳房は、見るからに弾力ある肉で形作られながらも、やや上気した呼吸のたび小さく震えている。くびれた腰は一流の彫刻家が大理石から削りだしてきたような、目の覚める鋭い曲線で構成されている。一方、臀部はそれらの線と対称をなすかのように丸く、かつむっちりとしていた。けれども、それでいて垂れることなく、思わず触れたくなるような曲線を描いてもいる。驚くべきことだ。左右の肉を掻き分け、その奥にある薄灰色の窄まりを覗いてみたい――そこには、そのように思わせる魔力が秘められていた。爪先から頭頂まで総合していうなら、圧倒的なまでの「完璧」で構成された、美のイデア、女のイデア。八雲紫の肉体は、そういうものだった。

――しかし。そういった素晴らしきパーツ以上に、異性を容赦なく惹き付ける部位がある。よく整えられ西洋庭園のようである下腹の茂みから、さらに下。女性を女性として定義する、秘めやかなる裂け目。そこは微かな女の芳香とともに、魔性とでも言い表すべきものを周囲に放っていた。この場に男がいたなら、彼女のそこから目を離すことなど出来なかっただろう。蛾が灯火に吸い寄せられるように、男もそこへ、本能的に引き寄せられてしまうのだ。

姿見に己の裸身を映す。変わらず美しい。この世に並び立つ者などあり得ないと、自ら断言できるほど。だのに、そんな美しい自分がこれからすることときたら、ひどく醜いことだ。

腕を一振りする。隙間を人里に繋いだ。人通りもほとんどない裏路地だ。春とはいえ、夜はまだいくらか肌寒く、涼しい空気が部屋に流れこむ。腹を冷やしそうだが、どうせすぐ、熱いものをたっぷり注がれるのだ。別に問題ないだろう。

そのまま、爪先から隙間に入っていく。何ひとつ纏わぬ、生まれたままの姿で、夜空の下に。腰までくぐったところで、隙間を大きく絞る。そのまま壁に手をついて、尻を突き出す姿勢をとった。向こう側からは、剥き出しの下半身だけが見えることだろう。声も伝わらないので、まさに正体不明の下半身だけが向こうに現れていることになる。

「あはっ」

また笑った。この八雲紫が、偉大なる妖怪の賢者が、こんな馬鹿丸出しの奇行に及んでいるなどと。けれどもその奇行が、それを咎める自らの意識が、なんとも刺激的で面白かった――

やめられず、ついつい何度もしてしまうほど。

机の上に放った新聞を見やる。嘘やでたらめを大げさな文句で塗り固めた、三流と呼ぶことすらおこがましいようなゴシップ紙。けれども、あの記事だけは真実だった。彼女には分かる。

――なぜならあれは、私のことなのだから。

妖怪にも性欲はある。強力な妖怪は、性欲も同じだけ強かった。紫も同じだった。それだけ欲が強いと、定期的にガス抜きでもしないと、色々と立ちゆかなくなる。この行為はまさに、そのガス抜きにあたるものだった。

紫はそのまま、しばらく動かなかった。何かを期待するような表情を浮かべながら、じっと待っていた。やがて、客が訪れる。

「っ、ぁ」

なだらかな肩が、小さく震える。誰かが身体に触れたのだ。隙間の向こうでさらけ出されている下半身の、むっちりとした尻肉に。おっかなびっくりといった風情で、つん、と。

「ま……マジだったのか」

向こう側から、そんな独り言が聞こえた。若い男の声だった。あの記事か、それに類する噂か知らないが、真に受けて夜中にのこのこと出歩いてきたに違いなかった。

おめでとう、君は幸運だ。この八雲紫の身体に、触れられたのだから。

つん、つん、と、目の前のものが本物かを確かめるように、彼は尻や太腿をつついてくる。

目の前のそれが、本来なら目にすることすらもおこがましいようなものであることも知らず。本当はもっと別の所に触れてみたいのだろうに、まったく、遠慮深いというか、臆病なことだ。こっちだって、本当に触れてほしいのはそこではないというのに。

「く、ふ」

それでも紫は、微かながらも吐息を零す。向こうの様子は、こちらからは分からない。どのタイミングでどこを触れられるかも分からないという状況は、目隠しされているのと同じだ。それはなかなかに刺激的で、彼女を興奮させる。

そうこうしているうちに、触れ方が少しずつ、積極的になっていく。とはいっても、肝心のところはまだ避け続けていたが。ともかく、指先でつつくだけなったのが、掌で触れるようになり、尻肉を揉みしだくような真似までし始めた。こちらが嫌がりも抵抗もしないことに自信をもって——悪しざまにいえば調子に乗って——いるのだ。

「よ、よし」

それでも、そこに触れるのはそれなりに覚悟を要したらしい。当然といえば当然だ。そこは女性にとって重要であると同時に、男からしても、己の種を植えるための特別な部位だ。己を鼓舞するような呟きの後、彼の指は、紫の秘所に触れた。

「ンッ」

「うお、お、おお」

秘貝の筋に沿うように、ぴとりと、硬い指が触れた。あちらに悪気はなかったのだろうが、ずいぶん焦らされてからの接触だ。その程度の接触でも、ぴりっとした官能が生じた。一方の彼はといえば、よほど感動したのか、溜息混じりの大げさな声をあげていた。よほど女と縁のない人生を送ってきたのだろう。

「おお、うぉおおおおお」

彼は遠慮なく指を動かし、淫花を擦り上げ始める。先ほどまでのおっかなびっくりといった様はどこへやら、だった。おそらく、女陰のもつ魔力が彼を虜にし、自制を忘れさせたのだ。紫としても、その方が都合がよい。激しい獣欲をありったけぶつけられる方が好みだった。

「う、う、うおお、これが、これがっ……」

「ふふっ」

これが女の陰部か――そう言いたいのだろう。つまるところ、この男はこれまで、女の裸を見たことがないのだ。女への縁のなさに劣等感（コンプレックス）を抱き、かといって性欲を抑えることもできず、果ては阿呆くさい与太話を信じて毎晩うろついていた童貞が、この男なのだ。

――夢が叶って、よかったじゃあないか。

「はぁ、く、ンッ、あぁ」

「おっ、おおおっ」

彼は相変わらず愛撫を続けている。吐息が熱を帯びていく。腹の奥が、ほのかに熱くなる。

それに対し、黄金郷でも見つけたかのような声があがった。彼が冒険家の感動を覚えるのも、当然というものだ。自分の指技で、女が濡らしたとなれば。

紫の淫花は今、朝露を浴びたようにしっとりしはじめていた。

実際のところ、濡れたのは技術云々というよりも、刺激に対する生理反応によるものだった。正直、彼はただ擦っているだけだったからだ。だが、彼の頭にそんな物悲しい発想は存在していないようだった。彼の中では、それはあくまで、己の指遣いがもたらした結果なのだ。

もちろん、仮にそうだったとして、性感を覚えることと身体を許すこととは別問題だ。彼がそういうことをして良いということにはならない。だが彼はそんなことになど気づいていないらしく、濡れさせたことが免罪符になると言わんばかりに、指の動きを速めていく。

「んッ、はっ、くぅん」

挨拶程度の単純な行為でも、技術の優劣は明らかになってしまうものだ。彼は技術の面では、良くいってせいぜい中の下だ。女の身体に触れられるという事実に舞い上がっており、相手を悦ばせようという気遣いが感じられない。これは、大層モテないだろう。

しかし、紫からしてみれば、それは必ずしも悪いことではなかった。——この私が、大妖怪たるこの八雲紫が、こんな情けない男の自分本位な欲望の餌食にされるなど。そういう考えは、彼女の自尊心を強く疼かせる。その刺激こそ、彼女が今まさに求めているものなのだ。

「あはっ！」

一際高い嬌声があがる。彼の指は花弁に守られた入り口を掻き分け、体内に入り込んできた。十分濡れた肉穴はそれを暖かく迎え、自らの襞をねっとりと絡みつかせる。

「あああ……これが、これが」

そう、それが女の膣内(ヴァギナ)だ――と、定義するのはまずかろう。顔、肉付きのみならず、秘部においてすらも、紫は卓越していた。品のない言い方をするなら、名器だ。そんなものを女性器の典型であるかのように一般化してしまえば、世の中に女性器と呼べるものは存在しなくなる。

彼は幸福であり、そして不幸だった。ただの人間が、二重の意味で人ならざる肉体を拝み、あまつさえ触れられた。それは間違いなく幸運ではあるが、同時に、目を覆いたくなるほどの悲劇でもあるのだ。最初に触れたものの度を越した素晴らしさゆえに、彼は今後、他のどんな女に触れる機会を得たとしても、絶対に満足できまい。そのことに本人が気づいていないのは、ちょっとした諧謔だった。熱い溜息を浮かべながら、紫はにやにやとした笑みを浮かべていた。罠に引っかかった馬鹿へ向ける、嘲笑だ。

当の彼は、体内に入り込んだはいいが、指を動かさないでいた。焦らしているわけでないというのは、紫にもわかっている。悩んでいるのだ。調子に乗りに乗ったことで、彼の頭の中には、ある大胆すぎる考えが浮かんでいる。それを実行するか否か、迷っているのだ。

とはいえ、実行せずにいられるはずがない。濡れたヴァギナを目の前にしたとき、雄は己の猛々(ペニス)しき棒をねじ込まずにはいられない。まして彼は童貞、その行為を経験したことのない、

一種の敗者(負け犬)だ。そんな者が、勝者の側に立つチャンスを、ひょんなことから与えられたのだ。飛びつかないでいられるはずがない。

「んっ……」

指が引き抜かれた。膣肉はちゅぷっと音をたてる。彼が怖気づいて逃げたというわけでないことは、紫も分かっていた。彼女でなくとも、服を下ろす衣擦れの音を聞けば、これから彼が何をするつもりかなど——自分が何をされるかなど、分かるというものだ。

隙間の向こうで、彼は自身の一物を露出しているのだ。目の前の、得体のしれない、しかしれっきとした女性器を貫く(犯す)ために。彼の心は、大胆すぎる考えの側に傾いたのだ。

その瞬間は、なかなか訪れなかった。代わりに、ああだのううだのいう呻きが聞こえてきた。この期に及んで、挿れて良いものかどうか、まだ決めかねているのだ。良心の声やら何やらが、邪魔をしているらしかった。馬鹿な男だ。顔すら見えないのだから、使い捨ての性処理道具と割りきればよかろうものを。

そもそも、良心がどう喚いたところで、結果など変わるはずがないのだ。欲望は必ず、理性を超克する。そういう風にできている。今回もそうだ。童貞である彼にとって性交は無限大の重要性をもつもので、従って葛藤もそれなりに大きかったようだが——同じことだ。

「い、良いよな、抵抗しないほうが悪いんだし、そもそもこんなとこでこんな格好してたら、おっ……襲われても、文句、言えないだろ」

呪文のようにぶつぶつと呟いている。自身に言い聞かせているのだ。己を咎める内なる声を、黙らせるために。紫はそこに、駄目押しの一撃で援護する。ゆるやかに、腰をくねらせた。

「……は、はは、なんだよ、誘ってるんじゃんか。俺、誘われてんじゃん。ならしょうがない、俺、悪くないよな。そうだ、そうだって。向こうから頼んできたんだもんな」

尻肉を、強張った感触が包む。彼の手だ。まだいくらかおっかなびっくりの感はあるものの、遠慮はだいぶ失せていた。他人（ひと）のせいにできたからだろう。

「ここ、だよな」

「あっ……は」

熱く硬いものが、ぬかるんだ入り口にぴとりと押し当てられた。ゴムのたぐいに隔てられてなどいない、ありのままの雄棒。それが今、彼女を貫かんとしている。腹の奥、女の象徴たる小部屋が熱くなる。期待の吐息が零れる。笑いも一緒に。雄が雌で自らの性欲（スベルマ）を処理（諸説）しようとする、まさにその瞬間。ここだよな、などという台詞は、あまりにも間抜けだ。

「っし、い、いく、ぞッ……」

ぬ、ず、ず……と、少しずつ、少しずつペニスが体内に入り込んでくる。亀頭が肉襞を掻き分け、奥へ奥へ進もうとする。けれどもその歩みは、亀よりも遅い。初めての膣内をじっくり味わっているのだろう――いや、というより、単純に刺激に堪えられないのだろう。

「はいッ、たァッ」

「童貞卒業、おめでとう。ふふっ、ふふふ」
ぽつりと呟いた言葉により、見も知りもしない相手の身勝手な欲望に付き合わされているという状況を、彼女はより確かに認識する。そんな状況にあって、彼女はむしろ楽しげであった。行きずりの相手に、無責任に、使い捨てられる――あえてそう考える。それは、彼女の自尊心を、じくじくといたぶっていく。たまらない。まったく、たまらない。お前は何をしているのだと、頭の中のまともな自分が言う。その言葉は鞭のように彼女を打ち、昂ぶらせる。
「んッ、くぁはっ、はっ、ッあ、ん！」
先ほどまでよりも明確な声が、薄暗い部屋に響いた。抽送が始まったのだ。誰とも知らない男のモノが、聖域を踏み荒らす。高貴なる八雲紫のヴァギナを。肉襞をめくられるたび、快楽が下半身から頭を突き抜ける。先ほどと比べても大きな嬌声が溢れる。
膣で感じる彼のモノは、本人と同様、さほど立派とはいえなかった。長さも太さも逞しさも技術も、紫の求める水準には及ばない。けれどもそれが、かえって彼女を興奮させる。自分を抱く男は、大層強く、知恵者で、あちらの方も立派な丈夫であるべきだ。でなければ、大妖怪である自分に、到底吊り合わない――彼女はそのように考えている。だのに、今、自らの最も重要な部分への侵入を許している相手は、掃いて捨てるほどいる凡百だ。耐え難い屈辱だ――その屈辱があるゆえに、この遊びは、普通のセックスなどよりはるかに愉しいのだ。
「あんっ、あぁ、いいっ、あはっ、あっあっあっ！」

「く、うォお、なんだこれッ、うァァア」
紫の声が艶を帯びるほど、向こう側から届く声が、短く詰まったものになる。女を味わったことのない者にとって、彼女の肉体は一種の暴力だった。快楽という暴力だ。
「アア、はッ、ァ、くぅッ、ぅオオぁ」
「あん！　あは、んっ、あっあっ、はぁあっ」
彼の抽送は止まらない。それどころか、肉同士のぶつかる乾いた音は、大きくなっていく。腰を止めることなど、できるはずがないのだ。八雲紫とは誘蛾灯で、彼はそれに集る蛾だった。引き寄せられるのは、いわば宿命なのだ。
獣の唸り声が響く。肉のぶつかる音と淫らな水音、さらに紫の濡れた媚声もだ。物理的には物足りないとはいえ、先に述べたような愉しさはあるし、そしてなにより、性交は性交だった。女の最も大事な部分に男の最も下衆な部分を受け入れ擦り合うこの行為は、相手が彼のような不出来な輩であっても、一定の快楽を生み出していた。弱い拳も数を打てば次第に効いてくるように、技術のない彼の抽送も、紫をだんだんと良くしつつあった。
だが、彼にはしょせん、それが精一杯だ。
「あ、う、ア、あああッ、くそ、ダメだ、ぅッ、ああ」
ピストン運動は、先ほどまでに輪をかけて雑で余裕のないものになりつつあった。膣内で、モノは一層膨らみつつある。その意味するところはひとつ――射精が近いのだ。

紫は小さく溜息をつく。良くなってくるのはこれからだというのに、一人で勝手に達しようなどと。尻切れトンボとはこのことだ。とはいえ、ろくに女に触れたこともない者が八雲紫を相手にして、これだけもったのだ。褒められたほうではあるのだろう。褒められたほうであるから、褒美をくれてやらなくては。きゅう、と締めつけ、肉襞を絡みつかせてやった。

快楽を与えるという狙いもあったが、それ以上に、モノを引き抜かれないようにと考えての事だった。こんな情けない男のことだから、逃げる可能性は大いに考えられた。性の楽しみの最後は、熱い滾りを腹の中に注ぎこむ以外にありえないというのに。

――感謝するがいい。八雲紫に種を植えるという貴重な経験は、国一つ買える金を積んでも、手に入れられない奴は絶対に手に入れられないものなのだから。

「え、ちょっ」

驚いたような声が聞こえた。やはり膣外に射精すつもりだったらしい。馬鹿な男だ。抵抗もしなければ顔も見えない行きずりの穴なのだから、そんな無意味な遠慮などしないで、無責任に使い捨ててしまえばよかろうものを。

「っ、あ、ああ。そ、そういうことか。はは、なら、しょうがない、よな。もう抜けないし、誘われたし、膣内射精したって、いいよな。誘ったのは向こうなんだから、そうだよ、そうだ」

下半身だけの生物――少なくとも向こうから見れば――に対してぶつぶつとうるさいことだ。しかし、彼とて目の前の奇妙な物体に本気で語りかけているわけではあるまい。この言葉は、

彼自身に向けられているのだ。種をつけてしまいたいという本能的な欲求と、そんな無責任なことはできないという倫理観の批難。二つのせめぎあいを、前者の勝利という形で終わらせるために。もっとも、わざわざそんな手間を掛けずとも、理性は欲望には勝ち得ないのだが。

「う、おぉおおお！」

「あはぁぁッ……！」

膨れに膨れたペニスは、やがて弾けるしかない。風船と同じだ。ただ、風船が何も残さないのに対して、こちらはちゃんと残す。白く濁る欲望の滾り、遺伝子の詰まった熱い子種を。

ぐつぐつと煮えたぎるそれは、彼の睾丸から解き放たれ、尿道を通り、紫の膣内へと放たれ始めた。熱いものが流れ込んでくる。愛など欠片もない自分本位な欲望の塊、下衆さを極めた汚らわしい汚汁、彼女には到底見合わない子種が。それは我が物顔で紫の肉穴を白く染め上げ、己の遺伝子を刻みつけていく。それだけにとどまらず、子宮にまで入り込んで、卵子を求めて一斉に泳ぎ始める。彼女を、孕女（はらみめ）にするために。

性交は、取り返しのつかない行為の一つだ。手篭められて汚された女が、汚れたという事実を抱えて生きてゆかねばならないのはそのためだ。だとすれば、性交の終わりであり象徴でもある膣内射精（なかだし）などは、いわば最も取り返しの付かない行為だ。そんなものを受け、貧相な男の貧相な性処理に使われて、紫はしかし、悲しみなどしない。それどころか、法悦極まった声を上げる。これこそが、この最低最悪の奔流こそが、自分の望んだものなのだ。ゆえに彼女は、

あるべきでない侵入者を、あろうことかきゅうきゅうと抱きしめ、どぐん、どぐんと脈動するペニスから白濁を搾り取っていく。

「オ、あッ、あぁッ、なんだこれ、なんだ、コレッ……！」

一方の彼はといえば、想像を絶する快楽に、ひたすら翻弄されているようだった。やはり、ものすごく幸運で、ひたすらに不幸な男だ。人生を一千万回やり直したところで手に入らないだろう機会を得られたのは、間違いなく幸運だ――その引き換えとして、二度と射精できないという、呪いじみたものを得てしまった。そう。彼は二度と射精できない。当然のことだった。旨いものを食って舌が肥えてしまうようなもので、これほど鮮烈な経験の後では、どんな女を抱こうが、自らモノを扱いてみようが、射精に至るだけの満足など得られるわけもない。

なんとも贅沢な性的不能者（インポテンツ）が、ここに生まれた。

「あはっ、ふぅ……」

「うが、ォッ、おお、……お」

獣の呻きは、ようやく収まる。灼けた砲身の脈動も。紫は若干の物足りなさを覚えつつも、こんなものかと一息ついた。彼はしばらく動かなかった。荒い息遣いだけが聞こえる。あまりの経験に、放心しているのだろう。その間に、鉄のようだった一物は萎え、柔らかな本来の姿に戻り始めていた――紫の膣内（なか）で。

やがて、彼は腰を引く。ぬろろろ、と、肉襞はそれにすら絡みつき、彼をびくびくと震わす。

引き抜かれる瞬間、にゅぽぉと音がした。汚された肉穴の奥が一瞬空気に触れ、ひやりとする。行為の終わりを感じさせる感覚だった。

とろり、と、己の穴から、彼によって吐き出された種汁が溢れ落ちていくのを感じた。それほど大量に射精されたというわけではなかろう。単に、弱い男の弱い精子だから、あっさりと脱落していくというだけの話だ。やはり自分には釣り合わない男だ。――だからこそ、良い。

「あら……」

童貞の有り余ったエネルギーで二回戦に突入すると思っていたのだが、足音が遠のいていくのが聞こえた。ざっ、ざか、ずっ、と、微妙にリズムが狂っているあたり、覚束ない足取りだ。先の射精で、精魂尽き果てたのだろう。八雲紫という女の身体は、童貞には強烈すぎたらしい。拍子抜けだったが――まあ、他にもどうせ客は来るだろう。構わない。

これで終わるつもりは、彼女にはなかった。まだまだ情欲の炎は消えていない。

そもそもこのようなことをし始めたのは、己の欲望の処理に困っていたからだった。男漁りなどできない。幻想郷の管理人という立場にある以上、妙なことをして醜聞を受けるわけにはいかない。それに、自分のプライドが、そんな浅ましいことはできないと言っていた。

第一、そこらの馬の骨では駄目なのだ。八雲紫という大妖怪の相手をするに足る格と技術を持ちあわせていなければ。そして当然、そんな輩がそうそう転がっているはずもない。幻想郷は名だたる女妖怪を取り揃えているが、男についてはどういうわけかボンクラばかりだった。

藍に夜伽をさせたりもしたが、何度も呼んでいるうちにマンネリになってしまった。

そんなとき読んだのが、外界の本だった。壁の穴に上半身だけ通して、下半身を好き放題にされる、とかなんとか、そういうずいぶん特殊な趣味の漫画だった。

漫画は漫画、あくまでフィクションである。それを実際にやろうと考えるのは愚かで無茶なことでしかない。ところが紫はそれを、実現する価値のあるものだと考えた。

その行為は、作中で「壁尻」などと呼ばれていたか。考えてみるに、悪くないのだ。互いに顔が見えないという点が、醜聞を広めたくないというニーズに一致しているというのもある。けれどもそれ以上に気を引いたのは、それが彼女にとって未知の行為だったということだ。

妖怪は精神に重きを置く生物だ。そして退屈は精神を傷つけるものであり、それゆえ、彼ら・彼女らの天敵である。退屈に対する特効薬として、「何かしらの刺激」が挙げられるのだが、必ずしも万能ではない。というのも、紫は長く生き過ぎているからだ。長く生きれば、大抵のことは経験済みになる。見聞きしている、したことのある物事から、大した刺激は得られない。

逆にいえば、見も知りもしないことは、それだけで大した刺激になりうる。未知とは生きるための糧である刺激を生み出す重要な資源であり、彼女にとっては貴重な概念だった。だからこそ、壁尻と呼ばれたその行為に、手を出さない術はなかった。

「おっ、おったおった」

しばらく余韻に浸りながらじっとしていると、声が聞こえた。聞くだに粘っこい声だった。

足音が、こちらに近づいてくる。こちらを探していたのは明らかだった。
「いやぁ、久しぶりやなぁ。最近見つけられんかったから、悲しかったわァ」
「ん……っ」
四十半ばの男の声だ。男は当然のように紫の身体に触れる。陰唇に指をかけ、割り開いた。身体の奥に、無遠慮な視線が入りこんでくるのがわかる。ごく限られた相手にだけ見せるべき場所を、行きつけの蕎麦屋が営業しているかどうか確認するような気軽さで見られている。
「あらら、使用済みかいな。よくもまぁべっとりと射精してくれてるわ。まっ、しゃあない。へへへ、ちょっと待っときや、すゥぐ、わしのチンポで掻きだしたるわ」
ごそごそと、服を脱ぐ音が聞こえてきた。先の男とは違い、迷いがない。目の前の穴を使うことを、当然と考えているのだ。擁護のしようもない腐った考えだ。そんな男のちり紙代わりにされようとしているのだ、自分は——嗚呼。
「おほぉ、相ッ変わらずエエケツしとんなぁ、ムッチムッチの、チンポハメられるためにあるようなケツや。これで上半身もありゃあ、そりゃもうオメコするために生まれたようなカラダやったろうになぁ。多少顔がブッサイクでも、皆喜んで抱くわ」
「んぁ、ぅ、くん」
豊かな双臀を、男は遠慮もなく揉みしだく。目の前のそれが、そのようなことのために存在しているのだとでもいわんばかりの扱いだった。そうだ、それでいい。そうやって物のように

扱われるときに覚えるじくじくとした心の疼きこそ、自分が最も欲しているものなのだから。

「ああ、ほんま、触り心地もバツグンやな……っと、こんなんいつまでもしてたら可哀想やな、早いとこポコチンハメたらなあかん。こんなヨダレだらだら垂らしたオメコがあるんやから」

肉棒が、ぴとりと押し当てられる。手慣れたものだった。ここだよな、などと間抜けなことを言ったりはしない。そして男は、愛撫もなく、己の捻くれた欲棒を――八雲紫にねじ込んだ。

「っ、あはぁあんッ！」

嬌声が飛び出す。突き入れられた肉傘は、紫の襞を摩擦し、彼女に確かな快楽を与えた。

「おぉ、ケツがふるふる震えよるわ。眼福ゆうのはこういうこっちゃな。よっしゃ、エエもん見せてくれた礼に、たっぷり気持ちよくしたるからなァ」

「ぁッ、んぅッ、は、あっ、ひんっ、あ、ちんぽっ、おちんぽきてるぅっ」

ぬぶッぐぶッと、粘っこい水音を伴いつつ、抽送が開始される。エラは先ほどの宣言通り、胎内に残っていた子種を膣外へと掻き出していく。

聞けば、亀頭があのような形状になっているのは、まさにこのような用途――つまり、他の男の遺伝子を排除し、女が己の子を孕む確率を向上せしめること――のためだという。顔すら知らない男どもの繁殖競争に、自分は巻き込まれているのだ。自分の意志など関係なく子宮を奪い合われ、最終的に勝った者が、自分を孕ますのだ――そんな考えが、彼女に淫らな言葉を吐かす。膝が、腰ががくがくと震え、その身を駆け抜ける快楽の大きさを表現している。

「おうおう、絡みついてくるわ。相も変わらずスケベなオメコしおってからにホンマ。こら、ちょっと気ぃ抜いたらあっという間に射精るな。気ぃ引き締めてかからなあかん、のォッと！ほれ、ほぉーれほれほれ、これがエエんじゃろが、おっ？　嬉しげェにオメコ締めつけおって、おほっ、おぉっ、この引き抜くときの絡み具合がッ、たまらんッ」

ずぐずぐと肉のスコップでもって紫を穿ちながら、彼は言う。彼は、いわば常連だ。いくら顔も姿も分からないといっても、毎度毎度こうもペラペラ喋られれば、覚えもする——まあ、仮にこの男がものすごく無口であったとしても、やはり覚えてはいたのだろう。何度も何度も使われているうちに、紫の身体は、彼のペニスの形を、抽送の技術を、最もはしたない部分で覚えてしまっていた。会ったこともない相手だというのに、ペニスだけは知っているのだ。

この男のモノは、ずいぶん上向きに反っており、かつ左曲がりだ。太さも長さもエラの張り具合も普通だったが、その湾曲が、良いところを刺激してくれるのだ。本人も本人で、自らの一物の特徴を把握しているようだった。腰遣いは、特徴が活きるように、くいくいとしゃくり上げるような動きになっていた。話し方と同じで、ねちっこい動きだ。

「くぅ、最高のオメコや。ポコチンが好きで好きでたまらんちゅう感じや。ホンマ、ド変態の、淫乱の、男とみたら咥え込まずにはおられんような、そういう穴や。オメコ汁もぷっしぷっし噴いて、そこまでしてチンポ嬉しい嬉しい言わんでも伝わるっちゅうのに、自己主張の激しいことで……へへへ、なんや、また締まりがようなったわ。スケベなこと言われて感じとるんか、

感じとるんやろう、ケツとオメコと足だけの生き物なクセして、一丁前に。ぐふふふ」

他の男とは一味違うストロークを繰り出しながら、彼は目の前の尻に次々卑語猥語を並べる。彼はおそらく、目の前の尻が、本当に下半身だけの生物だなどとは思っていない。そう思っているなら、話しかけるのは無駄なことだ。下半身には音を捉える耳も、それを解釈する頭も、ついていない。それでも語り続けるのだから、逆説的に、彼が上半身の存在に感づいているという結論が導き出せる。まさかその中身が、大妖怪・八雲紫だとまでは思っていないだろうが、ともかく彼は、見えない上半身に対し語りかけている。こんな手段で男を咥えこんでいるお前は本当にどうしようもない変態だと、見下し、嘲笑っているのだ。

そう、見下されている。嘲られている。この八雲紫が。神隠しの主犯にして幻想郷の管理者、長い時を生きる賢者が、いくら真実を知らないとはいえ、こんな一介の、下衆な人間風情に。屈辱だ。本当に、他に喩えようもない屈辱だ。そしてその屈辱は彼女に、味わったことのない恍惚を与えてくれる。味わったことのない。それは刺激、すなわち彼女の糧だった。

「ほぉれ、ここが好きなんやろう、ホレッ、ほれほれッ、オメコが泣いとるぞォ」

「あぁ！　んァ！　はッ、あぁんッ！　ひっ、はぁあぅッ！」

ぐりぐりぐりぐりと、入り口から少し奥の背中側を、腰をしゃくるようにして亀頭で擦ってくる。彼女の最も弱い部分だ。そこが弱点だと、彼は知っているのだ――そんな重要な情報が露見してしまうほど、何度も使われてきたということだ。こんな、道端で潰れて死んでいる蛙

以下の、ちょっとデコピンの一つでもしてやればそれだけで弾け飛んで死ぬような輩に。
「んはぁぁッ、ひぃくッ！　あぁッ、あっあっ、いいっ、ちんぽ気持ちいいいっ！」
垂れ流しになっている声は、幸い向こうには伝わっていない。今使っている隙間は特別製で、こちらから向こうへの音の伝播を防ぐ術がかけられている。だからこそ、思い切り喘ぐことができる。思い切り喘いだ方が気持ち良い。だから喘ぐ。当たり前のことだ。
「ッぉ、あはッ、んんぁ、はッ、あぁぁあああっ」
「可哀想にのォ、こんな半端なとこで放り出されて。よっぽどの下手くその相手させられたんやろうなァ。よかったのお、わしが来て、エエっ？」
にゅぶっ、ちゅぶと、肉棒が出入りするたび、淫蜜が卑猥な音を立てている。はなはだしい精神的エクスタシーの中で、彼女は肉体的にも相当に高まりつつあった。この男、巧いのだ。直前に相手したあの童貞のせいで、情欲の火は半端に掻き立てられている。この男はそのことを見抜き、己のペニスでもって火を煽り続けていた。その努力は、形にならんとしていた。
「そぉら、膣内が震えてきよったわ、イくんやろ、え？　イくんやろうが、そらイけッ、イッたらご褒美に、だァい好きなもん、くれてやるわッ。妊娠したらセキニンとったるわい」
「はへっ、ちんぽ、ぉおっ、あひ、はぁぁッ、あ、あはあッ、イッ、くぅうっ」
絶頂の兆候も、とっくの昔に知られている。膣肉が悦びに震え、男根をきゅうきゅうと締め付ける、それが彼女の、絶頂のサインだった。男は目ざとくそれを見つけ、激しいピストンで

とどめをさしにいく。クズのものとはいえ、ペニスはペニスで、ピストンはピストンだ。膣内を蹂躙する雄に、紫はただ淫らなよがり声をあげ、腰を振りたくることしかできなかった。

――責任をとる？　そんなつもりなど、小指の先ほどもありはしないくせに。本当はただ、膣内に射精したいだけのくせに。嗚呼、でも、そんな下衆な考えが、この上もなく気持ちいい。

「そぉらイけイけイけッ、イったら褒美に射精したるぞォ、だらしない淫乱オメコに、わしのザー汁ぶちまけて孕ませたるわッ、オライけッ、そらイけッ、ぬォ、オッ、オオオオオッ！」

（サンプルはここまで）